

令和3年度秋田県総合政策審議会
第2回農林水産部会 議事要旨

1 日時 令和3年8月6日(金) 午後1時30分～午後3時40分

2 場所 議会棟1階大会議室

3 出席者

【農林水産部会委員】

川 田 将 平 (有限会社アグリ川田代表取締役)
工 藤 浩 一 (農事組合法人たねっこ統括主任)
工 藤 裕 紀 (秋田県漁業協同組合専務理事)
田 口 宗 弘 (秋田県木材産業協同組合連合会副理事長)
高 橋 紅 (有限会社たかえん取締役外食事業部長)
中 村 正 子 (秋田ふるさと農業協同組合代表理事専務)
藤 本 陽 子 (株式会社タカヤナギ商品本部・地域サポート)

【県】

伊 藤 真 人 (農林水産部次長)
舛 谷 雅 広 (農林水産部参事(兼)農地整備課長)
佐 藤 大 祐 (農林水産部農林政策課政策監)
本 藤 昌 泰 (農林水産部農業経済課長)
本 郷 正 史 (農林水産部農業経済課販売戦略室長)
阿 部 浩 樹 (農林水産部農山村振興課長)
草 薨 郁 雄 (農林水産部水田総合利用課長)
加賀谷 由 博 (農林水産部水田総合利用課秋田米ブランド推進室長)
黒 澤 正 弘 (農林水産部園芸振興課長)
小 林 満 (農林水産部畜産振興課)
大 山 泰 (農林水産部水産漁港課長)
清 水 讓 (農林水産部林業木材産業課長)
三 森 道 哉 (農林水産部森林整備課長)
菅 伸 生 (企画振興部総合政策課)
小 関 裕 紀 (観光文化スポーツ部秋田うまいもの販売課)

【事務局】

秋田県農林水産部農林政策課

4 部会長あいさつ

○ 川田部会長

本日から、具体的な提言書の作成に向け、分野ごとに議論を深めていくことになろうかと思うので、ざっくばらんに皆様からの意見を頂戴したい。よろしく願います。

5 議事要旨

○ 川田部会長

審議内容は議事録としてホームページに掲載される。その際には、委員名は特に秘匿する必要がないと思うので、公開としたい。

それでは議事（１）、「新時代にサキホコレ！攻めの農林水産戦略」について、事務局から説明をお願いします。

□ 事務局（農林政策課）

～資料１、２により説明～

○ 川田部会長

ただいま事務局から説明があったが、最終的には参考資料２のような提言書として、まとめていくので、資料１に沿って意見をいただきたい。

資料１は、農業、林業・木材産業、漁業、農山漁村の４つの分野にまとめられているので、農業から順に意見を伺う。

また、今年度の審議会は、新たな県のプラン策定に関するものであるので、プランのゴールとして資料に記載のある「目指す姿」についても意見をいただきたい。

では、工藤浩一委員から願います。

○ 工藤浩一委員

早期経営安定に向けた新規就農支援について、市町村やＪＡで手厚く取り組んでいるものと認識しており、前回の部会でもこれ以上は難しいとの指摘があった。改めて現場を見ると、先輩・後輩といった縦のつながりや、例えば研修センター修了者同士やＪＡ部会の若手農家といった横のつながりはあるが、地元の農家や法人との連携といった、斜めの人間関係が不足しているのではないかと。新規就農者と地元で既に頑張っている人たちとの連携が欠けているのではないかと考えている。

一方で、それは勝手にやるべきもので、地元の中で自然に生まれてくるものとも考えているが、その地域で新たに農業を始める方について、集落内を越えた近隣農家とも連携できていれば、分からない時に聞きに行ったり、行き詰まっても農業法人に就職したり、半農半Ｘのようなスタイルになるなど、幅広な動きがとれるようになる。新規就農者が毎日朝から晩まで忙しくて大変というように、いきなり何でもやるということはないと思っているので、地元の人たちと自然発生的に情報交換できるよう、最初に入口を作ってあげればいいのか。

その都度の雇用でもいいので、農業法人で人手が足りなければ手伝う、といった自由度の高いつながりができればいいと思う。ＪＡ等の担当は異動するので、新

規就農者だけで悩まないよう、地域に入っていく入口を手助けできればと思う。

次にスマート農業関係について、10年後に経営体当たりの面積が2倍になるというのは、猶予がない状況であり、もう少しスピード感を持たないと、管理が行き届かず荒れた土地になってしまうのではないかと。現状の農業法人は余力がなく、簡単に面積を増やせるところは多くはなく、特に県南部では、余力のない法人が多いと思う。加えて、スマート農業を導入しても、簡単に倍の面積を管理できるわけではないので、現在の状況から更に2倍になると言われても難しい。

農業水利施設の効率的な保全管理の推進について、基盤整備と併せて進められると思うが、最近、災害対策として堤防ができたり、河川改修されたりしており、川の流れが一気に変わっているのではないかと。今後の整備に当たっては、そういったところも考慮しながら進めてほしい。

目指す姿については、これで良いと思う。農業分野では「サキホコレ」を前面に出していくべきと思っている。「サキホコレ」から秋田県産あきたこまちにつながっていき、もう一度ユーザーに秋田県産米を再認識してもらえるチャンスと考えているので、「サキホコレ」を前面に出して欲しい。

また、目指す姿については、若い方が共感できるもの、中高生が見たときに面白いと思えるようなものが良いと思う。

○ 川田部会長

分野は違うが、工藤裕紀委員からも意見をいただきたい。漁業分野での取組で、農業分野に応用できるものはないか。

○ 工藤裕紀委員

半農半Xについて、農林水産全体を対象として取り組む、とのことだったが、私はそれでは足りないと思う。

目指す姿の中に、若い従事者の増加というのが何か所か出てくるが、全体としてそんなに人口が増えるわけではないので、半農半Xについては、農業にも林業にも漁業にも同じ人が携わるといったことでも良いのではないかと。一次産業だけではなく、幅広く可能性がある業種も含めて兼業体制を目指すべきではないか。

また、前回部会長からアルバイトの話が出たが、短期の軽易な作業だけではないと思う。ある特定の時期、特定の作物に関して専門的な知識や技術を持っている人は、その時期以外は別の分野で活躍してもらい、必要となる時期に専門知識を発揮してもらおうといった形で、専門者をサポートするようなもの考えた方が良い。

対象地域については、今はコロナ禍で難しいものがあるが、県外を含めて広く紹介するなど、働きかけが必要ではないか。

漁業で考えた場合、網を作る技術は、かなり専門的な知識が必要であり、例えば同じ定置網であっても、場所によって網の構造が違ったり、今の若い後継者は技術を持っていない。底引き網を作るのは夏場だけだし、定置網は冬場だけである。漁業に従事しない方でも、こういった技術を持っている方が特定の時期に活躍するような、年間通したライフサイクルができればいいのではないかと。

去年出た「かっこいい」という話について、何がかっこいいのかということになるが、漁業というのは非常に楽しい面白いかっこいい、といった話は後ほどさせてもらいたい。農業でも林業でも、実際に従事している人間が気付かないかっこよさがあると思うので、直接作業に従事していない方々から、いろいろ意見を聴いてもらった方が良いと思う。

○ 川田部会長

では、田口委員、お願いします。

○ 田口委員

私は就業人口に関して非常に関心が高く、10年後に労働力が半分以下になるというのが本当にショックで、恐ろしい数字だと思っている。半農半Xにもつながることとは思いますが、結局何をするのかとなると、ここに記載のとおり、経営面積を2倍にしたり、AI・ICTを駆使して効率を上げたりということにならざるを得ないと思う。

また、食べ物に関しては、賛否両論あるが、同じ労働力で経営効率が上がらない場合、2倍収穫できれば同じことかなと思う。DNAの組み替えなどは、反対される方もいるが、こういった現状を見ていると、そんなことを言っていられないのではないかと思う。何度も試験して安全性を担保した上で、2倍の量を収穫できるようにするというのを、現実問題として本当に考える必要があるのではないか。

あと、人口減の中で、労働力をどこから確保するかである。若者や生産年齢人口の労働者に、秋田に帰ってきてもらうための対策は当然であるが、生産年齢人口に入っていない65歳以上の方の活用も必要である。80歳ぐらいまで現役でいていただくような取組も必要ではないか。

日経ビジネスに有訓無訓というコラムがある。その6月11日号に島根県雲南市の元市長の速水雄一さんのコラムが載っていた。その回は「市民・企業のチャレンジが過疎の町を変えた」というタイトルで、要は、座していれば衰退、まずは行動を、ということで、彼がやってきたことを書いてくれている。雲南市は2004年に3つの市町村が合併して誕生した市で、人口が3万6000人、高齢化率が39.7%である。合併で面積が553k㎡と東京23区の約8割に匹敵する規模になったものの、大半は山林で空き家や独居、高齢者家庭が目立ったということである。財政再建も必要で、お金もなく非常に大変だったが、地域自主組織に地域交流センターの運営を任せ、福祉や住民間同士の交流など、小規模多機能な拠点に作り変えようと考えたそうである。

また、地域住民が自らセンター所長等を選ぶようにしていった結果、最後には人口の流出が止まり、入ってくる方が増えたり、若者から声が上がったりするようになったとのことである。

さらに、80歳を超えるような高齢者がパソコンを覚えたり、積極的にITを駆使して取り組んだ結果、30代40代の人達にもその効果が波及し、若い人たちが子育てに応用するような形ができあがった。

人口流入が増えたという政策で、同じ過疎地域である秋田にとっても、この方

の政策は非常に参考になると思います、紹介させていただいた。

サキホコレについては、つや姫よりも甘みと弾力があって美味しいという印象であった。あきたこまちと異なっているところは良いと思うが、つや姫等もブランド化されているので、負けないようにブランド化など流通販売対策等を強化していただきたい。

○ 川田部会長

次に高橋委員から。

○ 高橋委員

サキホコレについて、非常に美味しいと思った。冷めたときに、甘みなど非常に美味しく感じる。仕事柄、お米のおいしさを商売に落とし込んだらどうかと考えており、外食や中食、お弁当などに非常に合うのではないかと思うので、自信を持ってそういったところに進めていって欲しい。

経営力の強化と新規就業者の確保・育成について、私は卒業後に就職した経験があり、また、嫁いで経営者サイドになった訳だが、経営というのは、一言で「経営」と言っても、簡単なようで非常に難しいと実感した。

私が思うのは、厳しい現場に身を置くと、その時すぐには分からないが、厳しいからこそ知識も増えるし、人のつながりの大切さをすごく感じるということである。担い手の方の経営力に関しては、小さな企業でも農家でも法人でも、経営するとなったときに、何も知識がないまま世の中に出てしまい、壁にぶつかって壊れてしまうのが非常に怖いので、周りのサポートが必要である。

農業経営については、自然相手のものなので、こうでなければならないということよりも、自然相手であればあるほど多面性が含まれてくると思う。経営者が経営の勉強をしたいということに関しては受け入れてくれるところがほとんどだと思っているので、例えば農業をやりながら、稼いだお金でいろんなところに経営の勉強に行ってみるといったような取組があると良い。

また、厳しい現場がありながらも、他業種も含め、多面的に経営の現場を見て、見聞を広められるような様々な現場を経験できる機会があると良いのではないかと。数字の問題はすごく大きいので、それを多方面から吸収できるのは非常に良いと思う。簡単に経営力といっても、強化するのは大変であり、その辺が必要と思った。

ロボットなどスマート農業について、様々な補助金があると思うが、実際にどういう方向性で使われ、どういう結果を残したのかが非常に大事である。自分もいろんな補助金を受けているが、「こういう結果を出したい」「こういう数字を上げたい」という具体的な目標を立て、その結果まで見届けることが非常に大事だと思っている。数字は、社会的にどれだけ必要にされているのか、どれだけ評価とされているかということの結果だと思うので、そういった目標があることによって、ある程度の緊張感を持続しながら取り組み、どういう結果を出せるのか追求していくことにつながる。

目指す姿について、「かっこいい」という話があった。かっこいいというのは、

他人から見てカッコいい、素敵だなと思う、ということである。現場で働いている人が生き生きとしているところを見て、若い人たちが「カッコいい」「ああいうふうになってみたい」と思うのではないか。一生懸命やっている姿を見ると、誰もが美しくカッコいいと感じると思うので、経営力や技術力を持った人が現場で活躍している姿が若い子の心に止まれば、未来は明るいのではないか。

また、「女性起業トップランナー」ということに関して、女性や男性をあまり区別しないご時世であり、男性も女性もトップランナーになって活躍できる場があれば、女性も男性と同じように人材育成が図られるのではないか。今までの男性社会だったからと言って、女性だけを対象にするというのもどうかと思うし、女性も男性もお互い切磋琢磨しあいながら、活躍できる秋田県というのが理想なのではないか。

○ **川田部会長**

中村委員、お願いします。

○ **中村委員**

最初にしいたけについて、どんぐりマーク（日本で伐採されたほだ木や樹木を使用した菌床から生産されたしいたけの証明）や国産品・県産品の周知という話だったが、中国産菌床等の影響で、量が増えて全国的に市場が溢れ、価格が下がっていることが一番のネックであり、県が増産を呼びかけても、現状としてはそのような状態が続いている。このため、しいたけ等も海外展開できないかと思う。秋田紅あかり等で取組があるが、しいたけについても輸出を検討いただきたい。

無料職業紹介所の全県展開については、今、全県で5JAが取り組んでおり、JA秋田ふるさとでも、ようやく準備が整い、資料も作って理事会を通した。雪害からの復旧に向けて、10月からりんごの植え替えを始める必要があるので、まずは10月にプレオープンとし、正式には令和4年4月から本格的に稼働する予定であり、農協と行政で労働力確保に向けてサポートしていきたい。

移住者の支援については、先日の新聞に、秋田県は移住者が少なく、隣県は多いなどとあったが、私の住む横手だと、どうしても雪がネックになってしまう。魅力をPRしたいと思っても、試しに来た方が「こんなに雪が多いと無理だ」という話をされるので本当に難しいが、空き家対策と併せて実施することで、人口減少が幾らかでもストップできるのではないか。資料には相談会やインターシップによる、と書かれているが、住居の提供といった具体策も入れていいのではないか。

また、サキホコレについては、サキホコレをPRすることによって、あきたこまちも全国の皆さんに再認識いただければいいなと思う。

○ **川田部会長**

次に藤本委員、お願いします。

○ **藤本委員**

資料1の目指す姿について触れさせていただく。

「若者の就業先として魅力的な経営力の高い農業法人等」、「女性起業のトップランナー」とあるが、若者や女性という概念に縛られなくてもいいのではないか。

仕事柄、いろいろな方から産直や仕入の契約を結びたいというお願いをいただき、それを売り場につなげている。

ほとんどの方が新たに農業を始めた方々で、老若男女の境目がない。20代や30代で初めてやるといった方や、定年退職をきっかけに就業する方など、いろんな方々がいる。若いとか女性といった区別なしに農業に関わる方達を増やし、こうした方々が楽しみを感じながらお金に換えていくための道筋を付けられれば良いのではないかと。このように比較的小規模な生産者の窓口として、多少なりともキャパシティがあって販売につなげさせていただいている。大規模法人やJA出荷とは違う視点かもしれないが、そういった生産者の方々は、「自分がした経験をもう少し深掘りして、規模の大きい方と連携したい」とか、「もう少し商品の作り方を勉強したい」という思いがあって、農業を始めようとしている傾向が見受けられる。そのほかにも、飲食店をやっていたが、自宅に畑もあり、自分の家で作ったもので、少しでも飲食事業にプラスして収入を得たいと農業を始めたという方もいた。

このように、どこかに勤めるという形ではないが、農業に関わる方々が少しずつ増えていると実感している。そういう方々がこれからも農業を続けられるような道筋があればよい。

その中で、成功体験のある事業主で、この方に教わりに行けば、経営やものづくりのステップアップにつながる、という人がたくさんいると思う。そうした先生役になる農業従事者で、弟子を取るような人はいないだろうか。

そういう方々が新たに農業を始めたい方々の研修の受け皿になるとともに、弟子のような形で学んだ方々が、第一線で活躍されている農業法人などの先輩方の思いを受け継いで後継者となって後に続いていけるよう、後押ししていくことも必要ではないか。

北限の桃の平野良一さんは高齢だが、弟子が結構いた。例えば鹿角から増田に教えに行くなど、いろんなことをフットワーク軽くやられている姿をずっと何年も見ており、いいモデルケースだなと思った。特殊な事例かもしれないが、先輩が後輩に伝えていくことがシステム的にできればいいと思う。

○ 川田部会長

では私からも、思っていることを申し上げたい。

マーケットに対応した複合型生産構造と流通販売に関連して、秋田牛や比内地鶏、サキホコレもだが、単一のものでブランド化することも必要だとは思いますが、この中の順位付けをして、マーケットインの視点でアピールするという手法も考えていただきたい。最高品質の秋田牛や比内地鶏、60kg当たり2万円といった高価で売れるサキホコレといったように、それが最高品質の秋田県産のものであるといったことも、切り口の一つとしてあってもいいと思う。

スマート農業の普及については、行政では難しいかもしれないが、これを普及させるには5Gの回線が必要である。林業や漁業でも共通だとは思いますが、機械を無人化して遠隔制御するには、今の回線容量では足りない。当社で使っているほ場管理のアプリでも、データを読み込むまで20分くらいかかってしまう。スマート農

業を普及させていくためには、前提条件として回線網が絶対に必要になる。

目指す姿について、園芸や畜産の大規模団地を中心に、という方向性は良いと思うが、もう少し園芸の品目の裾野を広げても良いと思う。外から商品を持ってくると輸送で炭素を使うので、持ってこなくてもいいように野菜づくりを進めたり、野菜が地元でたくさん作られて地元に出回れば、価格も安くなり家計の支出も減るし、野菜が安ければ、野菜をたくさん食べて健康寿命が延びるかもしれない。個々の農家が自家消費分の一部を地元に出すなど、支援策ではないかもしれないが、そういう複合的なものも視点の一つとして持っても良いのではないか。

先日、地元の若い農業者や新規就農2年目の人たちと意見交換する機会があった。その際に、新規就農者等への対応として、補助金の情報がもっと早く来るといい、ということを言われた。一般的に、農業者には、11月～12月にならないと補助金の情報が手に入らないので、希望者に対してメールを送付するなど簡単な仕組みでいいので、構築できないかと言われた。

また、夢プラン事業に関して、内示が5月の連休明けになるが、作業に間に合わない作物が出てくるので、そういう品目に関しては、目標などの評価を1年間後ろ倒ししてほしいという話もあった。

時間も押しているので、農業分野はここで一旦終わりにし、林業・木材産業分野について議論していきたい。

田口委員からお願いします。

○ 田口委員

再造林について、方向性(2)の再造林の拡大と森林の若返りとあるが、是非力を入れてやっていただきたい。

棚卸し的に振り返ってみて、これまで再造林が進まず低迷した原因は何かと考えると、結局コストが合わないからということになる。このため、低コストの造林技術の普及と定着が必要で、これはもちろんやっていただきたい。

一方で、再造林率を28%から53%まで上げ、資源循環の仕組みを構築していくために、現在の技術やコストではいくらかかるのか、不足するのはどれくらいの額になるのかを出していただきたい。その上で、コストを下げる努力を行い、低コストで対応しきれない部分は、市町村において森林環境譲与税等を使った再造林の取組ができるよう、関係各所に働きかけをするといったことも検討してはどうか。

さらに、業界団体や林業、素材生産業者だけではなく、木材加工業者、チップ業者製紙業者、バイオマス業者など、木に関わる業種全体に対し、木を保全していくために必要な再造林率やそれに要する経費を提示し、相応の負担をお願いするような調整役が必要ではないか。

そうした取組を組み合わせることで、再造林のスピードが上がっていくのではないかと思う。

目指す姿については、カーボンニュートラルの実現は当然の話であり、SDGsの考え方が出てくる以前から、林業・木材産業はCO₂の削減に貢献している業界である。

東南アジアや南米などでは、一時、成長量よりも多く乱伐が行われ、CO₂ 増加の原因になったということであるが、日本の林業・木材産業では、それほど無茶に成長量以上のものを伐採してきた訳ではなく、現在も成長量よりも低い数字で作業している。これからもきちんと、国産材の利用も含めて木を使っていただきながら、カーボンニュートラルへの貢献などもPRしていければ良いと思う。

○ **川田部会長**

では、次に工藤浩一委員、お願いします。

○ **工藤浩一委員**

目指す姿について、カーボンニュートラルの話があったが、まさにそのとおりでと思うし、既に実現に貢献しているという観点から、何かもっとメッセージ性があるフレーズがあれば良いと思った。既にこれだけ貢献していて、更にこれだけといったような目指す姿が良いだろうと思う。

人材育成の部分では、林業大学校等で即戦力になるような人材を育てているという中で、今の場所に加えて、もう1か所別の場所に増設すれば、遠くて通えない人にも対応できる。林業に携わりたいという人が漏れないように意識調査を行うなどといったことも含め、検討してはどうか。

○ **川田部会長**

次に工藤裕紀委員、お願いします。

○ **工藤裕紀委員**

2点お願いします。

三陸のカキの事例にあるように、山と海のつながりは、非常に重要な部分があるので、漁業の立場からも森の維持をお願いしたい。

半農半Xの話に関連して、平成29年に農林中央金庫の仲介で、農業法人と漁業者について、人が必要な時期や余剰となる時期の調査を行ったことがある。それを見ると、農業法人では、必要なのが春から夏にかけてと10月の稲刈りの時期で、人を出せるのは冬場だった。漁業でも、人を出せるのは冬場であり、農業と漁業ともに、冬は仕事が少ないということが分かった。

その中で、山の方に目を向けると、山の方では冬場に仕事があるので、うまくマッチングができればと思う。既に生活サイクルができあがっている方では、なかなか難しいが、新たに従事する人に関しては、そういう視点で、年間の仕事の中に冬場の林業がうまく入ってくればと思っている。

○ **川田部会長**

では高橋委員、お願いします。

○ **高橋委員**

林業に関しては素人であるが、叔父が製材所をやっていたので、人よりは少し木に接する機会が多かったと思う。

林業への意識付けについては、教育現場や家庭環境の中で、幼少の頃から身近に山林や木の製品があるとか、プラスチックには出せない木の良さのようなものを感じられることが、すごく大事なきっかけになると思う。

家庭で身近に感じられる、例えばまな板だとすればこの包丁にはこの木が合うだとか、お風呂にはこの木が合うだとか、そういう身近な幼少からの記憶と、大人になって車の運転をするようになってから、例えばこの山には広葉樹がたくさんあってこういうふうに感じられるというような、きっかけのようなものが身近にあればいいと思う。

なので、例えば販売する場合、木の用途や、用途別の材質といった特性などについて細かく話をされると、消費者にも木に関する問題意識が芽生えるのではないか。また、県内では薪ストーブを使っている家庭が多いが、そういう場合でもこの木を使おうと思っているだとか、灯油に勝る威力があるなど、そういった木の良さを日常生活で感じることで、問題意識が芽生えるのではないか。

○ **川田部会長**

では、中村委員お願いします。

○ **中村委員**

高橋委員のコメントを聞きながら思ったところであるが、横手市山内地区には森林組合があり、その隣にウッドィさんないという、間伐材を使ったりしている会社がある。子供が小さいときに、夏休みに間伐材で椅子を作るなどの体験をして、それが20年経ってもしっかりと残っている。農業も林業も、小さいときからの体験というものを組み込ませて、木のことや農業のことを勉強することが大切と感じた。

○ **川田部会長**

では、藤本委員お願いします。

○ **藤本委員**

林業は一般の人の目に触れていても、あまりにも自然すぎて、それが仕事や経済になかなか結びついていないため危機感を感じにくいところがあって、とても心配な分野である。

今、近くの山を見ても、切ってこれから植えるのか、切りっぱなしなのか、太陽光発電施設関係のものか分からないが、いろいろなところで伐採が行われている。

以前だと、民間で植林などいろいろなことをやっている場面をテレビコマーシャルなどで目にしたことがあると思うが、一般の生活者が林業にもっと興味を持つための足がかりや、興味を持たせるプランなどがあってもいいと思う。

一般の生活者がお手伝いできることとして、もしかすると下草刈りや植林については、皆さん、共鳴して賛同してくれるチャンスがあると思う。きっかけや行動する勇気はないが、森を守ることの大切さは皆さん分かっているので、システムの何らかのチャンスがあればいいのではないか。触れる機会をまず増やすところからなのかなと思う。

○ **川田部会長**

私からは質問になる。

今、カーボンニュートラルが大きく動いているが、カーボンプライシングの取引は、林業分野ではもう既にやられているのか。

○ 田口委員

私が認識している範囲だと、CO₂のクレジットをやるには、かなりの量が必要になるので、まだ一部の大きな取引でやられている程度と思う。ただ、木材産業に関しては、当社の場合、丸太材積の2分の1が炭素固定量として計算される。材を組成するセルロースやヘミセルロース、リグニンなどがあり、材積の中に炭素が2分の1入っているということで、材積のうち2分の1は炭素を固定させて使っているとしている。木を燃やさずにCO₂の発生を抑えたという計算ができていて、既に排出量がマイナスの取扱いになっている。

また、灯油ボイラーなどにより、製材にも熱源を使うが、東北電力などでは石油や電力のCO₂の係数があり、当社の場合で計算すると、その灯油と電力の部分は、当社の炭素固定量全体の3%ぐらいで、カーボンオフセットされた残りの97%はクレジットとなっている。規模は小さいが、個別に見るとそういったメリットが出ている。

NHKの朝ドラ「おかえりモネ」では、東京に出て天気予報のキャスターをやる前、登米の森林組合で山と天気の話をしていて、登米ならではのことだと思うが、割と丁寧に、林業関係や森林組合の実情を反映した作りになっていたの、紹介させていただく。

○ 川田部会長

では、林業についてはここで終わりにして、水産業に移る。

専門である工藤裕紀委員から願います。

○ 工藤裕紀委員

今後の施策の方向性は、このような形でいいと思うが、問題点として、漁業と一般市民の間に見えない壁があるのではと強く感じている。このため、漁業の現場を一般の方に周知していくためのイメージ戦略が必要で、それが県産水産物の消費拡大にもつながるのではないかと。

漁業が特殊な世界で、外部からの参入が難しいイメージを持たれていると思っている。実は私も魚釣りが好きで、ずっと水産関連の仕事をしてきたが、漁業者になろうと思ったのは、60歳近くになってからだった。それまでは、なれると思っていたいなかった。そういう壁があるかと思っていて、身近な職業であるといった周知も必要なのではないかと。

一方で、新しい人が入ってくると資源の奪い合いになるという考えがあって、既存の漁業者には、なかなか新規参入者を入れたくないという意識がある。そういう寡占化意識については、漁協としても改革を図らなければいけない。そういう問題さえクリアできれば、誰もが入れる職業である。

さらには、やりがいがある職業であり、カッコいい職業であるということ。

やりがいについては、誰もが頑張った分報われる。自ら工夫し、魚がたくさん捕れたときの喜びは得がたいものがあるかと思っている。また、オンライン販売にもつながる話だが、自分が取った魚を消費者が喜んで食べてもらえるということは、何にも増して楽しいものだと、昨日実際にやっている人から聞いてきた。

既存の流通にはないような新しい流れであるが、生産者自身が喜びを感じられるような体制を作ることによって、新しい人の就業につながるのではないかと。

「カッコいい」という話については、ICTやITがある。船の先端機器はものすごいものがある。GPSを使って、周辺にいる船の動きが全部把握できる。どの船がどこで網を入れて、どのように動き、漁獲があった、という情報が、昔は帰ってくるまで分からなかったが、今は全部分かってしまう。技術の進歩の善し悪しは別として、ものすごい先端機器を使っている。

先ほど努力は報われると言ったように、場所の選び方や網の選定、海況の判断、潮の流れの判断といったトータルの知識が、結果として生産に結びついてくるというのは、ものすごくやりがいがある職業ではないかと思っている。

また、雇用型の船であれば、危険な作業があるので、ものすごく統率の取れたきびきびとした行動が求められることから、それを見て、カッコいいというふうに思うとの声も聞かれる。そういう漁業の実態を、一般市民の方にPRしていくことについて、当然漁協でもやるが、行政の力も貸していただきたい。

○ **川田部会長**

では、工藤浩一委員、お願いします。

○ **工藤浩一委員**

全体的な話になってしまうが、人材の育成確保について、食育や木育を教育の中に組み込み、県として推進していくことが必要で、年1回か2回、何かできないかと思う。それ以上は市町村や各団体等の役割だろうが、そういったものも、全ての分野で取り入れていただきたいと思う。

「カッコいい」という話について、昨年度、この審議会でカッコいい農業について発言した。「カッコいい」にはいろんな意味があり、汗を流して泥まみれになってもカッコいいし、最新機器を使うのも当然カッコいい、となる。

カッコいいと思われればいいが、そもそもかっこよくやることが重要である。だらしない格好でやるよりは、まずはしっかりと身だしなみから始まる。そんな中で、漁業は、きびきびとした動作など、カッコいいと思う。

目指す姿については、「蓄養殖の実用化により収益性が向上し」というところであるが、ほぼ確立されているものではないのか。

○ **工藤裕紀委員**

本県の場合、蓄養殖をやるための波の穏やかなエリアが非常に少なく、蓄養殖は相当遅れている。最近、漁港周辺の構造物を使った静穏域の中で生け簀養殖を行うなどの動きが出てきており、今後はある程度広がっていくのではないかと。

○ **工藤浩一委員**

期待できる技術ということで、力強く進めていただきたい。

○ **川田部会長**

田口委員、お願いします。

○ **田口委員**

トラフグの生産拡大を是非お願いしたい。

安全安心なトラフグの養殖を推進していただき、天然物に近い品質のものが安価で食べられるようになることがありがたいと思う。

スーパーに行って買い物をするが、日によって魚の種類などにばらつきがある。スーパーでも努力されていて、品揃えが良くなってきているが、こうした状況は、生産者からすればチャンスかもしれない。天気の悪い日ほどネットで買い物をしようと思うこともあるし、スーパーでなかなか買えないものがネットで買えるようになると、食べてみたくなる。漁の状況にもよると思うが、こうした新たな販売方法にも取り組んでほしい。

農山漁村分野の就業人口のところで、「中山間地域は平地の1.5倍のペースで人口減が進み」と記載があるが、地域の活力の低下は、どんどん進むと思う。50年後、100年後に、本当の奥地には人が住んでいるのだろうか、と思う。

批判を恐れずに言うと、特に水道等のインフラが問題になると思うが、供給できなくなるときが必ず来る。今でも既にそういう地域があるので、どこかで線を引かないといけないのではないか。それは遠い未来ではない気がしている。秋田市では、コンパクトシティという名前のもと、極力人や施設を集めていくような方向で、人口減対策をやっている。まだうまくいかないが、それは強制力が働かないからだと思う。

本当に発言が難しいのだが、ここまでという円周を引いてエリア分けしていくといったガイドラインを作っていくなど、今後何年か何十年か後には、誰かが提案してやらないと限界になるのではないか。

一方で、様々な工夫をすることで、観光地的な、もしくはレクリエーション的な場所として存続するのは良いと思うが、住み分けなどの工夫について、どこかでは議論する必要があるのではと感じている。

○ 川田部会長

高橋委員、お願いします。

○ 高橋委員

消費者目線や加工業者の立場としてだが、私が魚を買わせていただくのに当たって、漁協の問題など、非常にいろいろなことがあると感じた。新陳代謝をしていかなければいけない時代に入ったんだなと思った。

私は海育ちで、どうしても秋田の魚を食べたいという思いがあるが、若い人たちは、それを調理するところまでいかない。震災の時も思ったが、通常の社会の流れが止まってしまうことによって、このように必要なものが見えてくると思う。秋田県には、本当においしいものがたくさんあるのだが、一方で、料理の仕方を知らない人がいることや、市場で流通する量のバランスといった事情もあるので、県内での消費を拡大していくためには、県を挙げたバックアップが必要なのかなと思った。

自分が商品を提供する立場になってみて思ったことは、消費者はメニューがあると決められるということである。メニューがあるということは、消費者にとっては良いことだが、冷凍品を使わないようにしていることもあり、食材をどう提供す

るかが非常に難しいと思うときがある。メニューを決めて消費者に食べてもらうことが最初の壁で、大変なことである。

また、魚や海の環境について説明することがあるが、内陸にいると非常に遠い話になる。私は男鹿の海が近かったので男鹿の海の話をするが、同じ県内でも距離を感じることもあるので、もっとお客様にアプローチして、もっと身近に感じていただくことが必要だと思う。先ほど水の話もされていたが、環境問題に接点を見いだしていくような、そういう食べ物と環境とのマッチングといったことが大事ではないか。

○ 川田部会長

では中村委員、願います。

○ 中村委員

農山漁村の方について、里山の保全と活用とあるが、鳥獣被害の対策を入れてもらわないといけない。林業の項目には、野生動物の出没抑制などがあるが、農地での鳥獣被害が大きいという声が多いので、里山の項目に加えるべきである。

また、キラリと光る農作物とあって、ネーミングはとてもいいが漠然としていて具体性がない。目指す姿としてはこれでいいのかもしれないが、もう少し具体性があった方がいいのかなと思う。

○ 川田部会長

では、藤本委員願います。

○ 藤本委員

水産業だけ、全くの自然相手である。農産物は植えれば収入のめどが立つし、林業も同じくめどが立つが、海は環境の変化もあり、いろいろな規制もある。プロから見れば違うかもしれないが、獲れる魚種や季節性、量も不安定である。

また、担い手の面では、少なくとも横手や湯沢などの内陸部や、山間地からは、船に乗る発想が出てこない。そうすると、次の担い手として、学校に入ったりして就業していくのは、海沿いで育ったり、育った経験のある人など、何らかの縁がある方々になるが、それはそれで大変なことである。

三陸では捕るだけではなく、必ずかまぼこや塩辛などの加工会社がある。一方で、秋田県では、確かに加工業者はいるが、秋田県産の魚に限定している会社は少なく、三陸に負けている気がする。魚を捕ることも確かに課題だが、秋田県産の魚が余剰となる時期に、何かしら加工していくことが必要である。

今までは冷凍等だったと思うが、今の食卓は冷凍を乗り越えて、電子レンジで温めるだけで済む煮魚や焼き魚まで欲しがっている時代になっている。三陸の方からは、そういった商品の提案があるが、本県では、そういう加工までして、口元に近いところに持って行く流れがまだ少ない。ニーズはたくさんあるので、秋田県産の海産物がもっと口に入るためには、どのようなマッチングなどが必要なのか検討する必要がある。

究極のところ、会社にして、捕る会社が加工まで一元化するとともに、漁協とうまく連携していくことを考えてもいいのではないか。

○ 川田部会長

私は農業経営者で、漁業は全く知らないが、少し気になったのは、川の漁業の可能性はないのか。県内には結構大きな川があり、ヤマメなど川釣りに結構来ているので、船が入れるかどうかはわからないが、そこで養殖などの産業につながれば、水産業として足がかりの一つにできるかなと思った。

魚以外にもあるのかもしれないが、視野に入れてもいいのではないかと。秋田の冬の海は荒れるので、そういうタイミングで川に入っていき、何かできれば面白いのではないかと思う。

中山間地域については、中間地と山間地は分けて考えた方がいいと思う。中間地に関しては、当社では170haを経営しているが、どうにか経営できる。これから2倍にしると言われると悩むが、現状ではどうにかなっているし、この先、現行の体系とは異なる栽培体系、具体的には無代掻き田植えや2年3作、無人トラクターなどを基盤整備とセットで導入することで、穀物に関しては多分それほど人手がなくても生産できるイメージがある。

できれば小麦は国産をもっと増産してほしい。輸入物はできれば口に入れて欲しくないと思っており、国産小麦が増産できればみんなのためになると思う。

山間地については、山間地の中でそれぞれの地域の特色があって、適した農作物があると思うが、山の上ではクルミなどでも良いのかなと思う。クルミは、クマが食べるので、そこを餌場にしてワナを付けることもできるし、そこが餌場になれば里に下りてこないといったこともある。また、クルミは脂肪の提供源になるので、この先10年、20年後には食肉が入手しにくくなってくる可能性を考えると、長期保存もできるし、油の提供源としては面白い。

毎年稲や大豆を生産するより粗放的に管理できると思うし、下草を抑える技術などもあるので、そういったものを進めることも一つの手法ではないか。

漁業に関してはいろいろと意見をもらったが、農山漁村分野について、もう少し意見をお願いしたい。

○ 工藤浩一委員

部会長から中間地と山間地に分けるべきとの話があった。確かにそう言われてみればそうかなという気もしないわけでもないが、今までの考えでいくと、1人50ヘクタールの規模をやりましょと国が言っている中で、おそらく中山間地域の農業は2～3人で賄えることになる。

一方で、作物の生産はできるが、草刈りなど農地の維持管理作業ができるのか、といったことも検討が必要である。稲の生産はできるが、農地の維持管理は2～3人では難しい。

また、中山間地域ならではの気候などを生かした生産について、ロットが少ないと言われることから、県内で産地リレーができればいいと思ったところもあり、このような産地間連携なども推進してほしい。

○ 川田部会長

他にはないか。

○ 田口委員

グリーンツーリズムに関連した部分で、去年もこの話を出したが、コロナの影響で県外に行くことができず、小中学生の修学旅行や研修旅行の場所が県内に切り替えられている。これは不幸中の幸いだったのではないかと考えていて、同じ県内でも秋田県は広いので、県北の子が県南に来て、暮らしだとか、そういうのを見るのもプラスになったのではないか。マイクロツーリズムとは別のものとして、小中学校のうちに同じ秋田県内を見て回るというのが非常に良かったと思うので、教育関連の事業として是非推進してほしい。

仙北市西木西明寺で、旅館を営業されていた方が秋田魁新報の私の履歴書のような記事に掲載されていたが、このように頑張っている方が増えるように、中山間地域ならではということ売りをするような施策があっても良いのではないかと。

○ 藤本委員

県で元気ムラの取組がなされており、ここに応用できる内容だと思った。小さなコミュニティの方々が、自分たちの特産品を発掘したり、伝統野菜やその地域に合った農産物を売り出したりするなど、いろいろと工夫し、自分たちから発信していくようなきっかけづくりをしていただいている。

今、山間地では、人口が減り、高齢化も進み、ニュース的にはマイナス要素が強いが、そこに住んでらっしゃる方は生きがいを感じて、そこが好きで、いろいろな経験をされている方々なので、元気ムラのような取組として、小さいコミュニティだけこういうふう頑張ってますよ、こういう特産ありますよ、まだまだ伸びますよ、これも作れますよ、これも取れますよというようなことをもっと広報し、必要によっては支援者とマッチングして、継続できるように応援していくことも入れ込んだ方がいいと思う。

そうすると、そこから、少量だけれども希少性の高い、特徴ある農産物なども出てくるし、住んでいる方々の励みになり、収入も得られるほか、同居している若い方にとっても、そういう背中を見られる良い環境になると思う。

○ 川田部会長

他に意見はあるか。

では、まだ言い足りない部分もあるかと思うが、時間も過ぎているので、本日は終了させていただき、議事進行を事務局にお返しする。本日の意見などを参考に、次回までに提言案をまとめていただき、また皆さんと協議したいと思う。

□ 伊藤農林水産部次長

長時間にわたり、大変多分野にわたって参考になる御意見感謝申し上げます。

分量も多かったことから、それぞれの意見に対して、執行部から個別にコメントしなかったが、印象に残ったところでは、新規就農者の横のつながり等をしっかりやって定着させていってはどうかという話があった。我々も新規就農者のフォローは非常に重要と考えており、貴重な視点だと思っている。

また、コメについては、我々もサキホコレを一つの材料にして、秋田米全体のブランドアップを図り売り込むことを考えているので、応援のコメントと受け止め、

計画にもブランド化や販売戦略と併せて反映していきたいと思っている。

林業関係のカーボンニュートラルについて、再造林のコストの話もあったが、再造林を進めるに当たって、今後、林業を持続的に発展させていくために、森林にはどういった効果があって、どれ程度の再造林が必要になるのか調査していくことにしているので、そうしたことも踏まえ、計画に反映させていきたい。

その他、漁業や農山漁村などたくさんあった。農山漁村の関係では、小さいコミュニティであっても地域の特色を掘り起こして、それを磨いていく、それを応援していく取組も大事ではないかとのことだったので、そういった様々な御意見を踏まえ、次回までに、皆様の意見を提言書に取りまとめ、お諮りしたいと思う。

次回も、暑い中、また、期間も短い中で大変申し訳ないが、引き続きよろしくお願ひする。

□ 事務局（農林政策課）

長時間にわたる審議に感謝申し上げます。

第3回農林水産部会については、9月2日木曜日、午後1時半からの開催を予定している。

委員の皆様には、開催通知を配付しているので、よろしくお願ひする。

また、本日の資料について、更に御意見等がある場合は、担当に御連絡いただきたい。

— 議事終了 —